



伊地知文庫  
文庫20  
138





連歌八十躰

紹巴作

Handwritten Japanese text in a cursive style, likely a list of 80 waka poems. The text is arranged in vertical columns and is partially obscured by a piece of translucent paper or tape. The characters are dark ink on aged, yellowish paper.



一紙不妄

伊地知氏書冊



一 之奇以中のみ

一 之奇経のみ

一 之奇あのみ

一 之奇たのみ

一 之奇けのみ

一 之奇ねのみ

一 之奇はのみ

一 之奇ひのみ

一 之奇ふのみ











一 又々切のり

一 切字解のり

一 節々切のり  
一 節のり  
一 節のり

一 十一のり

一 十八のり

一 上りのり

一 下のり

一 左のり

一 右のり

一 左のり

一 右のり

一 左のり

一 右のり

一 左のり

一 右のり

一 左のり

一 右のり

一 左のり

一 右のり

無心







よしあしつゝおんのみちをしせらるゝおしねもさうさ  
んをいけりてさうさうと月をいけりてさうさ由せり自  
ら又ぬきぬき際とあまの夜更けに月更けといふは  
多岐川一筋は石の心持は雲よりしる座席は後ハ一  
座のまもるさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
しやうさうさうの月更けいさうさうさうさうさうさ  
すうさうの月更けいさうさうさうさうさうさうさ  
あさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
程とぬきぬきいけりてさうさうさうさうさうさう  
いさうさう

東の御経のうら

一やうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
又おしねさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
極ゆるさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
又おしねいけぬきぬきさうさうさうさうさうさ  
又おしねさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
一やうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
一風おしねさうさうさうさうさうさうさうさ  
右のつぎさうさうさうさ



横より左のふたりの細い糸をさして、横にし、糸は  
ふたりの細い糸の中心の糸をさして、糸は  
横の糸をさして、糸の中心の糸をさして、糸は  
横の糸をさして、糸の中心の糸をさして、糸は  
横の糸をさして、糸の中心の糸をさして、糸は

正後ヶ根の白糸

正後ヶ根の白糸

正後ヶ根の白糸

右側の糸は、糸の中心の糸をさして、糸は  
左側の糸は、糸の中心の糸をさして、糸は

正後ヶ根の白糸

正後ヶ根の白糸

正後ヶ根の白糸

正後ヶ根の白糸

正後ヶ根の白糸

正後ヶ根の白糸

正後ヶ根の白糸

正後ヶ根の白糸

正後ヶ根の白糸

正後ヶ根の白糸

正後ヶ根の白糸



さうや

さうや

さうや

さうや

右の懸りやういふは又いふに似てゐる。一席よか  
えらふやうなぬらうき席のこゝろと似てゐる。一志ん  
らうやういふに似てゐる。一席よか  
他若しおひつちをいふに似てゐる。一志ん

ふふふふふふ

月も星もやうな光を放つてゐる

ふふふふふふ

何れもいふに似てゐる。一志ん

帰る屋敷の山は月夜

ふふふふふふ。後の方程をいふに似てゐる。  
うけ難い多し。一志ん。一志ん。一志ん。一志ん。一志ん。  
ふふふふふふ

余情をいふ

ふふふふふふ

ふふふふふふ

是れとよめの上を舞う。一志ん。一志ん。一志ん。一志ん。一志ん。  
のうに打破し又いつてゐる。一志ん。一志ん。一志ん。一志ん。一志ん。  
はくち。一志ん。一志ん。一志ん。一志ん。一志ん。



きとけし事

西津の舟は口刻れ多き事とて

舟も多し内ふのきとけし十日の刻れたる事侍し  
頃今の四州しる事け越は是よりうづすは是に兵城  
不てはこけりたる事し

近付し事

きとけし事と水濱のきとけし事

塩うまの浦ともきとけし事

舟も多し内ふのきとけし事十日の刻れたる事侍し

きとけし事と水濱のきとけし事

眺らし事

舟のきとけし事と水濱のきとけし事

入来りたる舟もきとけし事

是と眺らし事と水濱のきとけし事十日の刻れたる事侍し  
舟も多し内ふのきとけし事十日の刻れたる事侍し  
別成りたる事と水濱のきとけし事十日の刻れたる事侍し  
是と眺らし事と水濱のきとけし事十日の刻れたる事侍し

本歌と事



しるしの終しゆんしん

とてまゝにせしむるのよし

け敷よきとされぬ こととせむるは一大事しり氣の句  
よき初めはけしむるよし 事なむしあむるよし  
ふふせぬ事をしけむるよし 事なむしあむるよし  
さし初めの時氣のよし 事なむしあむるよし  
あむるよしとせむるよし 事なむしあむるよし  
限のよしとせむるよし 事なむしあむるよし  
たむるよしとせむるよし 事なむしあむるよし  
し

平家流のよし

あむるよしとせむるよし

あむるよしとせむるよし

け敷中流しはこい智を又いは左隠をいはて終い  
論終大まゝのよしとせむるよし 事なむしあむるよし  
あむるよしとせむるよし 事なむしあむるよし  
あむるよしとせむるよし 事なむしあむるよし

あむるよしとせむるよし

あむるよしとせむるよし

あむるよしとせむるよし



是ハ仔細おぼれぬん跡をこし能た平句の事なほ  
いねるる跡出も人よまうししなこころに能いさ  
とやそし我々のやよまもふかた又増ゆるはそ  
をよよの喜ん群の事歎何とぬあこころに  
めしとて

五音相通し

ちりり帰浦の事系音あ

是ハタナワテトヤ井上正三たこころに能いさ  
たぬし物々の人よま入事

ごさの事

あなそらそむ木の葉うまうねつる

是ハ中七文のよ二なこころ又うし二なこころあり  
いらんとこころ

いさよの事

田んぼの跡りの事の事

はそらぬの事おぼれぬん跡をこし能た平句の事なほ  
いねるる跡出も人よまうししなこころに能いさ  
とやそし我々のやよまもふかた又増ゆるはそ  
をよよの喜ん群の事歎何とぬあこころに

たしと修致もつねの事



うさぎの人をばらばらに斬る

るれらの自然たる其の陰

そのはらりと斬る下りて用ひたることし

名指す神人のあちりしめ入るるよ

映るる

控後死するもの

いしめたるその

是ハ夕の風にあたりて

殺すしきりて

白雲の事

東流りたるその

あまの

野風

おの

う

その

し

おの

15の















能子の位仲山の馬市よ

けあに何事のうめそとくはいふ

宗祐乃乃乃

とらあより眉のなをいのかんやよ

うね乃乃乃乃乃

ねあしとのこをいふ

夕暮のやぶる花の風

うねのうと

おひきく一人に

おひきく一人に

おひきく一人に

かねのうと

おひきく一人に

おひきく一人に

おひきく一人に

かねのうと

おひきく一人に

おひきく一人に

おひきく一人に

はな



口念中居し

新くもてあつた人のまゝに  
声もくもぬるはのちま

細き尾をくもくもくも

山川の橋のちまをくもくも

後にもくもぬるはのちま

ふらひもくもく人の親あつたあ

そのまゝやくもぬるはのちま

やうやくもぬるはのちま

まゝにやくもぬるはのちま

やくもぬるはのちま

やくもぬるはのちま

やくもぬるはのちま

やくもぬるはのちま

やくもぬるはのちま

やくもぬるはのちま

やくもぬるはのちま

やくもぬるはのちま

やくもぬるはのちま

けぬるはのちま



〜~~~~

一~~~~

松尾の跡〜

花のよは社風も恨めし

散る後のよをよきとて一字相面し

口初あ〜

〜~~~~

は初平あ〜

〜~~~~

疑句〜

初〜

い〜

世あ句い〜

〜~~~~

よ〜

わ〜

あ〜

は〜







とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし

とていひあひのやうにわし何をもぬるべし























と名切書

あぬる〜〜まれば〜〜あはさ

是し大なりし物も大なりぬれ小なる〜

大なりぬれ〜〜と〜〜人しあぬる

あ〜ぬる

又文章切字の〜

よれ〜〜と〜〜をの元

是のちの文章の中より〜〜の〜〜切字の〜

の〜〜遊守字紙〜一紙よ〜〜人

〜〜

切字の〜

新〜〜小お〜

け〜〜細〜〜

紙〜〜に〜

〜〜と〜〜相行の〜

い〜〜い〜〜

か〜〜は〜〜

〜〜は〜〜

あ〜〜と〜〜

〜〜と〜〜











わろとほあさうさう人の年用とすけし

十九よふに於て業のり

そらおんしれしあのちりあん

是ハ十七のちりあんしりあんあのちりあん  
下の上おんし十九よふに於て業のりしあうしけ  
いんあし

久すれあうのちりあんあのちりあんあのちりあん  
けあふよふに於て業のり

十二よふに於て業のり

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

十八よふに於て業のり

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう

あうあうあうあうあうあうあうあうあうあう



よめりすゝいよふねをよめり

夕暮のよめりすゝいよふねの縁

つゆの縁をよめりすゝいよふねの縁

よめりすゝいよふねの縁

あゝよめりすゝいよふねの縁

よめりすゝいよふねの縁

よめりすゝいよふねの縁

よめりすゝいよふねの縁

よめりすゝいよふねの縁

よめりすゝいよふねの縁

よめりすゝいよふねの縁

よめりすゝいよふねの縁

よめりすゝいよふねの縁

よめりすゝいよふねの縁

よめりすゝいよふねの縁

よめりすゝいよふねの縁

よめりすゝいよふねの縁

よめりすゝいよふねの縁

よめりすゝいよふねの縁











斗り一毛しぐは伊ととて又あつた魚

鯨のたぐひはあぢきなきもの

り居のあやうきうらまへ

とていれどもあつちやあつち

はとと鯨のあぢきなきもの

とていれどもあつちやあつち

はとと鯨のあぢきなきもの

危ういふは日田岩明の文筆

うはとと鯨のあぢきなきもの

うはとと鯨のあぢきなきもの

うはとと鯨のあぢきなきもの

あつちやあつち

と鯨の朝氣 鯨魚

けはとと鯨のあぢきなきもの

あつちやあつち

あつちやあつち

あつちやあつち

あつちやあつち

あつちやあつち

あつちやあつち



疎行一変

いふ事事々々々々々々々々々々

而もく乃月之終面此也

群用ハ皆也ト云々又ハ終面也云々

云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々

如げ口信々々々々々々々々々

用行一変

云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々

是本面也又ハ用行也云々云々

云々云々云々云々云々云々

平句と部乃

云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々

中道一変

云々云々云々云々云々云々







右之一紙及之我門入后と依慈之陸陸  
自筆執筆之相傳口傳至唐粉骨也  
秘事新要

是年二年秋之旬 法橋紹巴在判

一 五句紙を左のめり十とて心得但し一字五句紙  
日後の教多しなりと云

一 百韻連歌ハ先て用みせし五句紙等之  
まじり字をわらふ

千句之法度

一 平句一直 付書目宛

一 出合を近

一 詠礼停止

右條々如件 叱

百句之法度



一 平句一直 付吾自元

一 礼儀停止

一 出合之近 但亦先取事

右條々如件 已

千句ノ題

一 春之夏ニ 秋之冬ニ

景物早送取事之是百餘或十餘或千餘  
或一季中兼取諸于十日四季各日之

万句ノ題 玉者

春 各五之十

一 柳 雪 竹 柳 花 夏

夏

一 杜宇 橘 螢 泉

秋

一 之 映 秋 雪 月 厂 麻

冬

一 雨 冰 霰 雪

湯崎万句ノ題 五

一 柳 雪 竹 雪 竹 花 雪

歸所 春 日 蝶 花 梅 苗 代



雜子莖 夏

各二之十

一 檮 郭公 夏月 檉 莖 檉

白夏 春 涼 泉

文口二之十

一 萩 荻 相 色 麻 露 石 藉

檉 草 亮 野 公 落 月 厂

紅 葉 菊

各二之十

一 以 名 落 葉 露 名 月 冰 石 散

出 英 否 山 采 年 否

連 歌 子 句 時 是 盤 割

一	二	四	七	三	十	五	九	八	六
二	之	五	八	四	一	六	十	九	七
之	四	六	九	五	二	七	一	十	八
四	五	七	十	六	之	八	二	一	九
五	六	八	一	七	四	九	三	二	十
六	七	九	二	八	五	十	四	一	之
七	八	十	三	九	六	一	五	四	二
八	九	一	四	十	七	二	六	五	之
九	十	二	五	一	八	三	七	六	四
十	一	之	六	二	九	四	八	七	五



面十寸之内可用物

木之類

松杉 檜柳 青柳 木之若葉 櫻  
梅 櫻 木 木の葉 紅葉 木皮

草之類

冬草 若葉 草木 夏 葎 芦  
萩 萩 菖蒲 山の草 早田  
門田 冬草の草 苔 蘭 浅茅  
道 葎 葎 葎 葎 葎 葎 葎

草

竹乃類

五竹 黒竹 竹の林 若竹

虫の類

虫 螢 蜂 蝶 蜘蛛 陸

鳥の類

鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯

鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯

山の類

山 里田 一 炭 高 遠 近 尾 上 禁











乃于左而也仍折言戒之趣如斯



